

京都祇園

舞妓育ちの

銀座女将の恋

能町孝司

シャルル・ド・ゴール空港の一角に、ホテルがある。

そのロビーに、梶本祐子の姿があった。

不安げな面持ちで、勝彦の電話を待っていた。約束の時間の六時を過ぎても、携帯には電話がなかった。勝彦の電話に、祐子からかけてみたが、おかしな音がするだけであった。

近くに座っていた中国人と見える女性に「なぜ、かからないのだろうか」と携帯電話を差し出しながら聞いてみた。

その女は、祐子が発信したばかりの勝彦の携帯電話に電話した。首をかしげながら、祐子に電話器を返した。

「アーム・ソーリー」とだけ言ってロビーから出て行ってしまった。

ロビーは祐子一人だけになってしまった。このロビーにはホテルの受付はなく、受付を探してみようとロビーを出た。

ロビーの前は自由通路で、人にぶつからなければよかった。受付はこの裏側にでもあるのだからと車の通りに出てみた。大きなバッグを抱えた人が洪水のように押しよせてきた。

祐子はあきらめ、ホテルのロビーに引き返すことにした。ロビーの前の広場の手すりに寄りか

かり、人のながれを見ていた。

ふと下の階のTGVが停車する駅周辺をみていると勝彦らしき後姿が見えた。辺りを気にしている様子であった。勝彦のいる場所に一番近い広場に走った。

「勝彦さん」と思い切り叫んでみた。人ごみの中で、聞こえなかったのだろうか。

もう一度「前田さん」と呼んでみた。気付いたのか、あたりをきよるきよる見て、上の方に顔を向けた。

勝彦は急いでホテルのある階まで、息を詰まらせながら上がってきた。

「ああよかった。電話通じなかったの。心配したわ。迷子になったらどうしようかと心細かった」と安堵の念で疲れがどっと出た。

勝彦が先にこのホテルのロビーに着いて、出迎える筈だった。

パリ住まいしたことがあり、海外になれているはずだが、祐子にとって、必死の思いで探しまわった。それにしても良く再会できたものである。四十年ぶりではないだろうか。

ホテルのフロントまで、勝彦の案内で大きなバッグを抱えた人ごみの中を進んだ。その途中に、パリ市内に出るバス停があった。勝彦の勧めで、高速電車を乗り降りするのも大変だから凱旋門までバスに乗った。

バスの中はほぼ満席であった。フランスは人種のるつぼとあって、いろいろの国の人の顔がみえた。祐子もそのうちの一人であった。

途中、突然空が真っ黒になり、バスの窓をたたきつけるような雨になった。凱旋門近くのバス停に降りる頃には、虹がセーヌ川の上にかかっていた。バス停の足元には、ところどころ水たまりができていた。タクシー乗り場に行くとき長蛇の列をなしていた。タクシー乗り場の側溝には激しく雨水が流れていた。

道路の一部が冠水し、くつを脱いで、歩道をわたるひとも見かけられた。タクシーは、なかなか来なかった。突然の雨でタクシーを利用する人が増えたのだろう。タクシーをどのくらい待たばいいのかわからない。

勝彦は、

「歩こうか？」と言った。

「貴男の、住まいは近いの？」

「ポンピドー・センターの近くで、歩いて行けないこともないが、三十分はかかるね。」

「シャンゼリゼ通りを歩いてみるか」と勝彦は促した。

「でも、この旅行カバンをゴロゴロは無理よ」

「そうだね。石畳の歩道が多いから」と言っているとタクシーが着いた。

タクシーは、ポンピドー・センター前の広場に着いた。観光客が、広場にあふれていた。

センター前の路地を進むと右方に間口五メートル程の建物があり、勝彦は扉の方に向かい、鍵をポケットから取りだし扉を開けた。

廊下の先に古いエレベーターがあり、ボタンを押すと扉があいた。急いで乗ると外側の扉が閉まり、内側の格子状の扉がガタガタ音をたてて閉まった。ゆっくりと上昇していくのが良く分かった。五階でガクンと音がして停まった。

扉がしずしずと内側、外側と開いた。カバンを降ろし、暗い廊下を数歩歩くと勝彦は自分の部屋の前で止まり、扉を開けた。

その部屋は奥行きがあり長細く、突き当たりには窓があり、裏の家の窓が、すぐそばにあった。壁には、五十号位の赤、黄色、青の強烈な色彩の抽象画がかけられていた。部屋の真ん中近くに畳一畳ほどの厚い板のままの机があった。机には、パソコンが二台置かれていた。また、書類が散乱していた。

セミダブルのベッドが窓側近くに置いてあった。

「コーヒー飲む？」と台所からポットを持って出てきた。